

第40回

小島三郎記念文化賞

山口 恵三先生 — 推薦の辞 —

なか はら かず ひこ
中原 一彦
Kazuhiko NAKAHARA

山口恵三先生は、昭和45年（1970年）に長崎大学医学部を卒業後、大学院に進まれ、昭和52年（1976年）博士号を取得されました。その後、長崎大学医学部第二内科に入局され、感染症学の分野に進まれました。昭和55年（1980年）に長崎大学医学部助手（検査医学、第二内科）、翌年に講師となられ、平成2年（1990年）に現在の東邦大学医学部微生物学教室の教授に就任されておられます。厚生労働省の医療技術参与、東京都精度管理検討専門委員会委員、ヒューマンサイエンス振興財団の振興再興感染症研究推進委員会委員など、多くの委員を務めておられます。

山口先生は、臨床と基礎との接点を結ぶ臨床微生物学の発展と、本分野における若手研究者の育成に大きく貢献されてきました。特に、以下に述べるよ

うな課題への取り組みとその研究成果は、国内外の感染症学関係者からも高い評価を得られています。

1. 微生物学領域における臨床検査医学の向上

長崎大学医学部附属病院検査部細菌室の室長時代、微生物検査室の近代化を目的に、検査室の自動化と迅速診断、およびシステム化を全国に先駆けて完成されました。自動化の一端としてスパイラルシステムを初めて臨床に応用され、このシステムは現在では各検査室に広く導入されています。さらに、日常の薬剤感受性試験に微量液体希釈法を全国に先駆けて導入し、これらをルチン検査として定着させることにより、定量培養法や薬剤感受性試験の向上に寄与されました。



小島三郎記念文化賞贈呈式全景

2. 動物感染実験モデルを用いた感染症病態の解明

市中肺炎や院内感染症を対象に感染実験モデルを作成し、それぞれの病態について基礎的観点からアプローチを行い、かつ得られた成果を実際の臨床に応用してこられました。特に、独自に開発された肺炎球菌やヘモフィルスによるマウス肺炎モデル、および顆粒球減少マウスを用いた緑膿菌性内因性感染症モデルは、実際の臨床を良く反映しており、市中肺炎や院内発症型敗血症の解明に大きく貢献しております。また、循環式浴槽で社会的問題となったレジオネラ肺炎の疫学調査と病態解明に関しても多くの研究があり、高い評価を受けておられます。

3. 感染症における治療法および抗菌薬投与法に関する研究

in vitro, in vivo における抗菌力試験や小動物実験モデルを用いての新規抗菌薬を含む既存抗菌薬の治療効果と効率的投与法などに関する数多くの研究があります。それらの中で、緑膿菌慢性気道感染に対するエリスロマイシン長期投与の有効性メカニズムについて、微生物学領域でいま注目されている「クオラムセンシング システム」を抑制するためであることを世界で最初に報告されたことは高く評価されています。

4. 耐性菌に関する研究

現在、院内感染症の起炎菌として、MRSA, PRSP, VRE, VRSA さらには基質拡張型 β - ラクタメース (ESBL) 产生菌などの耐性菌が問題となっていますが、山口先生の教室は ESBL 产生菌に関する研究では我が国を代表する研究室であり、これまでに TOHO-1 および TOHO-2 といった新しい耐性株を報告しておられます。また、厚生労働省による全国規模での耐性菌サーベイランス事業にも責任者として深く関わってこられました。

山口先生を知る方は、先生の穏やかな人柄と包容力の豊かさには、誰もが納得されるところだと思います。私は、「モダンメディア」誌の編集委員会で何年か山口先生と同席させていただきましたが、先生の幅広い知識とリーダーシップにはいつも感嘆しておりました。またお忙しい中、私ども東京大学の非常勤講師として年何回か学生にレクチャーをお願いしていますが、いやな顔ひとつされず「私も楽しんでやっていますから。」と快く引き受けていただいていることに大変感謝している次第です。

以上述べさせていただきましたように、山口先生は臨床微生物学領域において幅広い活動と優れた業績を挙げておられ、また我が国における感染症領域のオピニオンリーダーとして啓蒙活動に携わってこられ、小島三郎記念文化賞に最適な方と考え推薦させていただいた次第です。今回の受賞を機に、先生のますますのご発展をお祈り致します。